

(第3種郵便物認可)

一 栄 谷 葛 一 の 異 見 私 見



愛知県といえはトヨタ自動車、がすぐに頭に浮かぶように、自動車や機械等の製造業が盛んであるが、豊田市の電照菊や施設園芸、名古屋コナシがよく知られるように農畜産業も盛んで、農業産出額約4分の1を畜産が占める畜産大県でもある。

名古屋から西に名鉄電車を使って15分のあま市に、(株)堀田農産商店を中心とする堀田グループの工場があり、友人からの誘いに乗って見学してきた。畜産物の資源リサイクルを業とするグループであるが、食用とならない不可食部位を食品原料・飼料・燃料等に再生

利用するレンダリング事業、原皮・皮革事業、ペットフード事業の3つの事業からなる。話しは二軒するが、牛は概ね生体重量700kgで正肉となるのは290kg、その42%にすぎない。牛は58%が、豚、鶏は50%が畜産副産物となる。すなわち家畜の正肉を食べれば、それと同じが、それ以上の畜産副産物が必ず発生するわけである。もともと畜産はこの畜産副産物の発生を必然としており、これを有効に生かして再生利用していくことによ

って成り立っているもので、これ抜きには存在し得ない産業なのである。

畜産副産物は、内臓肉は関東では毛ツ、関西ではホルモンと呼ばれ、副生物業界を通じて食品として利用・消費される。皮は皮革業界によって原皮とされ、革製品とされる。骨・脂肪等はレンダリ

SDGsを下支えする 資源リサイクル産業

ング業界によって、クッカーと呼ばれる釜で加熱・攪拌・乾燥させ、たろえで、油脂と固形分に分離される。そして油脂は牛脂やラード等の食用油脂や、石けん、クリス等の工業用品の原料として利用され、固形分については有機質肥料や飼料、ペットフード等の原料とされる。一部 焼却されるものもあるが、基本的にはほとんどが有効利用され、循環されている。レンダリングは完全に装置産業化されているだけでなく、脱臭技術も進歩し

ており、事前に抱いていたイメージとはずいぶん違ったものであった。話を聞くと、内臓肉は2001年のBSE発生にともない消費が落ち込み、その後微増傾向をたどってはいるものの、BSE前の水準とは大きな開きがあるという。また原皮はEU等でのアミアルウエルブエアの広がりにより合成皮革へのシフトが激しく、輸出が大きく落ち込んでいるだけでなく、価格も低落しており、ピークの2013年には年・豚皮あわせて150億円を越えていた輸出額は21年には90億円を切るなど、経営環境は厳しい。さらには設備の老朽化もすすみ、設備の更新を迫られてもいるようだ。

言うまでもなく肉を食べるといことは1頭丸ごと命をいただくということである。生きてくる間の命を尊重するアミアルウエルブエアも大事だが、副産物を有効活用して成仏させやるとはそれ以上に大事なことかもしれない。出た畜産物を全面的に、しかも早く受け入れて処理をしていく仕事は強い公共性を有してきている。中京経済圏の中で、こうした仕事を通して堀田グループは持続可能な「都市型地域循環型社会の構築」を目指している。肉を食べる消費者と行政は是非ともこの構想を共有し、支援していただければいい。

(農的学会デザイン研究所代表)